

鴟の舌打ち

森岡 正作

冬百舌鳥と

尖塔の十字架釣瓶落しかな
いつよりか遠見癖あり雁渡し
真水切る太き腕や新豆腐
十六夜の厨に古るる大黒天
砦なす全集本やすがれ虫
夕映えに鴟の舌打ち何かある
身に入むや納戸の奥に鉄兜

登四郎先生の『咀嚼音』に〈冬百舌鳥となりて墓域をいづるなし〉という句がある。盛んに飛び回っていた百舌鳥も、冬になって墓守りに徹しているイメージである。

わが家の裏庭にある少しばかりの竹林にも、ここ毎日朝夕を問わず百舌鳥がやって来る。そして、頭抜けて高く、枯れかけて葉もない竹の天辺に止まっている。竹の春にはしてみつともなく目立ち、根もぐらぐらしているの、伐ろうと思っていた竹だが、天辺で吹かれている百舌鳥が、一匹狼の浪人のように格好良い。それで、時には辺りを睥睨し、警備の警官が笛を吹くように鋭く鳴き、また、苛立つようにタタタタと舌打ちを始める。獐猛な小鳥で「鴟の贅」という季語もあり、雪国では贅のある高さで積雪を予想するといふ言い伝えもある。

毎日飛来しては、私の怠惰な脳を刺激するこの孤高の百舌鳥を、何か一句に仕立て上げたいと思うが、なかなか手強いのである。